

新しい科目「子どもの意欲と自己の形成」の授業と課題：資格取得との関連

学校教育講座(教育心理学研究室)・橋本 巖

1. 授業の目的と位置づけ

(1) 大学院カリキュラム改革との関連 本授業は、平成 22,23 年度において実施された本教育学研究科での大学院カリキュラム改革において、筆者が新たに開講した授業である。(参照：橋本巖(2009) 教員養成学部における大学院教育の在り方について 愛媛大学の場合、シンポジウム教員養成学部における大学院教育の在り方について：平成 21 年度日本教育大学協会四国地区研究集会(高知))。この改革は、まず学校教育専攻から行われ、「実践的指導力の育成」を目標とした。通年の共通必修科目の他、選択科目にも、前期中心の共通基礎科目と、後期中心の発展科目がある。共通基礎科目には、「教育課程・授業実践」、「生徒指導・教育相談」、「学級・学校経営」、「学校教育と教職の在り方」、「子どもの発達と学習」の 5 領域があり、本授業は、「子どもの発達と学習」領域の 1 科目である。

いずれの領域の授業も、学問的領域名というよりも学校教育における課題とその教育・支援を主眼に置いた授業名称となった。各教員にとっては 21 年度までの「前期が特論、後期が演習」という伝統的な形を廃し、前期後期それぞれに異なる教育課題等をテーマにした授業を用意することとなる。(なお、上記のカリキュラムには、特別支援教育専攻の特別支援教育コーディネータ専修に向けた科目を、学校教育専攻科目として位置づけたことが一つの特色でもある。)筆者の場合、情緒発達心理学特論が前期、同演習が後期であったが、情緒発達を扱う発達心理学領域の授業は後期に開講し、前期で開く本授業は、それまでの授業担当経験を生かしつつも、内容的には教育心理学分野での新たなチャレンジであった。

(2) 学校心理士資格との関連 同時に、本授業は、「学校心理士」という資格の取得要件(受験資格)関連の科目でもある。学校心理士とは、「学校生活における様々な問題について、子ども自身への直接的援助を行うとともに、子どもを取り巻く保護者や教師、学校に対して『学校心理学』の専門的知識と技能を持って、心理教育的援助サービス(アセスメント、コンサルテーション、カウンセリングなど)を行うことの出来る者に対して認定される資格」である。現職教員にも非現職教員にも、専攻を超えて高度な実践的指導力を身に付ける学びの一つの軸として、学校心理士の資格取得が機

能することが考えられ、平成 22 年度入学者から、本研究科において資格関連の単位を揃えられるよう、研究科スタッフの協力を得て実現した。本授業「子どもの意欲と自己の形成」は、学校心理士関連科目でいう「教授・学習心理学」という領域の一つに該当する科目として位置づけられている。また筆者は本研究科における学校心理士養成に関する担当者でもある。

2. 学校心理士取得のための専攻をまたぐ受講

学校心理士の資格関連科目は、学校教育専攻、特別支援教育専攻、学校臨床心理専攻の教員が協働して提供しており、特定のコースに入学・所属しなくともそれらの授業を履修すれば資格要件が整う仕組みになっている。本授業の平成 22 年度、23 年度の受講者をみても、学校教育専攻だけでなく、教科教育専攻、特別支援教育専攻、学校臨床心理専攻というすべての専攻から受講者がある。授業内容がたとえ非常に興味深くとも、このように広範な履修者があるのは、資格関連科目として位置づけられているからであろう。同様の現象は、他の科目でも生じている。以下、授業改善というより、履修指導という大きな視野に関わる 2 点を報告・指摘しておく。

(1) 従来では珍しかった、教科教育専攻の院生が特別支援教育専攻の授業を受けるなどのことが常態となってきている。これは、単位目当てとの評価もあるかもしれないが、受け入れる教員は、積極的に新たな教育機会として肯定的に捉えるべきことであろう。一方、各専攻・専修における修士論文指導や、専修での専門に特化した実践的指導力養成と、学校教育における心理教育的援助サービスの力量を培う汎用的な専門性としての資格取得とが、うまく両立するように今後所属専修スタッフの理解と、個々に応じた指導・判断という面でも慎重に履修支援していく必要が高まってきている。

(2) また、学校臨床心理専攻の臨床心理学コースの院生や、特別支援教育専攻の特別支援教育コーディネータ専修の学生など、他の資格を目指しハードワークが想定されるコースに入学した者が、むしろさらに学校心理士の取得に強い関心を持つ、という実態がある。むしろ、制度設計の時点では、これらのコースに属さない院生にも資格取得のチャンスと、ということで学校心理士は整備された

面があることや、履修が進む上での時間割上の問題から、単位を揃える上での工夫や苦労は避けられないようである。(院生が、なぜ資格を取得しようとするのかに関わって自問し周囲と議論することは、それ自体学びの動機づけを深める意味のあることではある)。また、大学院2年をかけてといっても、現職教員の場合、2年目の勤務という制約もある。

以上のような資格関連履修に伴う種々のハードルを乗り越え、むろん所属コースの修学・研究を優先した上で、23年度修了者(22年度入学者)のうちおよそ10名程度は資格要件の単位を修得した見込みであり、実際に4名が受験し、学校心理士(または学校心理士補)に合格した。

3. 授業のねらい、実際と評価

(1)授業目的 従来、本授業のタイトルにある「意欲」は、もっぱら学習動機づけと結びつけられ、「生きる力」における「確かな学力」の面で捉えられている。他方、「自己の形成」は、明らかに人格、社会性領域に属することとして、「生きる力」で言えば「豊かな人間性」との関連で考えられやすい。また、前者は学習指導、後者は生徒指導・教育相談、キャリア教育というように、全く別個に扱われて来た。しかし実践的には、子どもが自己に引きつけて学ぶときの意欲の高さや理解の深さ、子どもが自分自身を見つめる自覚化(メタ認知)の力、自分の方向性を見いださせる指導など、広範囲の授業・教育実践の中で、学びを通して自己形成を支援しようとする取り組みは広く行われるようになってきている。そこで本授業では完成した体系を講じるのではなく、実践的なチャレンジとして子どもの意欲と自己の形成の関連を学ぼう、探そうと呼びかける。授業目的としては「生きる力」の育成を、「学びを通しての自己形成」という視点から捉え、学校での学びとその支援の過程における、<学習-動機づけ-自己>の関係性を教育心理学的な視点から考え、実践的な課題と関係づける。」とした。そして、到達目標としては、以下の授業スケジュールに示されるキーワードについて理解すると共に、「教育的活動を通して動機づけが喚起され、その学びを通して自己が意識化され形作られる過程について、利用できる資源との関連で仮説的に説明できること」、および、上記を通して「授業への意欲を高める支援、学習がふるわない子どもの支援、授業や教育活動を通しての子どもの自己形成への支援」について、授業設計や個別の支援を意識できる、を挙げた。

(2)授業の内容、実態および授業評価 右欄の内

容を掲げ、前半は筆者による講義で進め、1/3ぐらいから、関心あるテーマをグループで文献・実践探索させて、一コマ授業するように発表させる形式で進めた。テーマ決定後も各グループは筆者と具体的に盛り込む内容と文献の相談時間を授業外に設け、準備を進めてもらう形式を取った。これは、文献収集、読解などの基礎を補助してよりよい発表を、という教育的意図とともに、学校心理士関連科目として盛り込むべき内容要素(教授・学習心理学領域では、学習についての心理学的理論、記憶と理解、動機づけ、学習指導と授業、学級集団とその組織化という5項目)をおさえる意味もあった。しかし負担感はかなりあったと感想に触れられていた。現職教員、教員経験者が受講者の半数程度を占めていたため、プレゼンテーションには、自己の実践例を具体的に盛り込んだ発表が行われ、いずれもたいへん意欲的発表だったとの声が多く刺激となったようである。半面、議論の時間が不足したとの声が多く、反省される。

第1回 授業のガイダンス:

第2回 わかるようとする子どもと学びの仕組み:

第3回 わかるようとする子どもと動機づけ:

第4回 興味・関心の形成と発達(興味とアイデンティティ)

第5回 体験活動からの学びと意欲 その1

第6回 体験活動からの学びと意欲 その2

第7回 人とのかかわりと学びの意欲 その1

第8回 人とのかかわりと学びの意欲 その2

第9回 学習の過程で自分と向き合う(個別指導):

自律的な学習方略とメタ認知、認知カウンセリング、
学習不適応ほか

第10回 自己の将来像や自覚化を目指した実践:

・将来の夢・目標(キャリア指導)と学習意欲。

第11回~14回 自己概念、将来像を明確にし、自尊感情をたかめるための教育実践例の検討:「いのちの教育」,「心理教育」,「学級の間人間関係づくりとコミュニケーションスキル」,「キャリア教育と自己」の4つから選択。

第15回 総括的な議論:総括レポート作成指示。

授業評価する資料として、毎回の授業についてメールで感想コメントをもらい、それを全員分プリントして次回の授業で配布した。相互に考えを知り合い、さらに議論が発展する要因となった。終了後の意見として「今までの自分の中になかった概念を調べるため、うのみにせず、発表内容について自分でも調べてみようといった気持ちが出てくるようになった。不思議な感覚だが、学習とはこういうことなのかもしれないと思うようになった。学びとは決して個人的営みではないと分かった」という受講の収穫の声があったことを嘯みしめたい。